

## 目次

1. 要旨 .....	2
2. 研究の目的・背景 .....	2
3. 研究の方法 .....	3
3-1. インタビュー実施概要 .....	4
4. 調査結果 .....	4
4-1. 三菱地所の Shall We コンサート（出張コンサート） .....	4
4-1-1. プロジェクトの経緯と概要 .....	5
4-1-2. 成果と課題 .....	6
4-2. 可児市文化創造センターala .....	7
4-2-1. 私のあしながおじさんプロジェクト .....	8
4-2-2. ala まち元気プロジェクト .....	10
4-2-3. 学校へ出張コミュニケーションワークショップ .....	11
4-3. アートによる社会包摂活動の課題 .....	13
5. 考察——調査結果から見える、成功要因と課題 .....	15
5-1. 可児市文化創造センターに見る共感の連鎖と付加価値向上 .....	15
5-2. 社会包摂活動のためのアーティスト育成 .....	16
6. 結論 .....	17

## 1. 要旨

昨今、文化芸術の「社会包摂」の面での活用について、文化芸術基本法に盛り込まれた。しかし 10 年以上前から活動に取り組んできた先駆者たちがいる。外出の機会が制限され生の音楽に触れる機会が限られた児童を対象に、プロの音楽家グループを派遣し、コンサートを行う「三菱地所の Shall We コンサート（出張コンサート）」、子供や一人親家族を公演に招待したり、学校におけるコミュニケーション教育を行ったりしている「可見市文化創造センターala」である。

可見市文化創造センターala における社会包摂活動を支え、発展させてきたのは、行政、施設職員、参加者、参加者の家族、協賛企業、学校などが一つの社会包摂活動に参加したり接点を持ったりして施設への理解を深め、その次の機会には運営に協力したり資金提供者となるなど、力強いサポーターへと変わっていく共感の連鎖であった。

一方で、学校で行われるコンサートやワークショップがうまくいくために不可欠な要素は、人間として生徒に向き合い、適切な対応ができるアーティストの存在であった。現場で求められるレベルの高さや本業との兼ね合いで、対応できる人数は限られ、開催頻度や開催場所の拡大が難しいのが現状である。そのため、アーティストの育成と認定制度の整備、その費用面での民間の援助が必要であると考ええる。

## 2. 研究の目的・背景

2017 年に改正された文化芸術基本法においては、第二条の基本理念に 10 項が新設・追加され、文化の役割に社会包摂的な概念が組み込まれた。

「10. 文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の関連分野における施策との有機的な連携が図られるように配慮されなければならない」<sup>1</sup>

この改正に先立つこと 10 年以上前、海外ではイギリスのアーツカウンシルが芸術が社会包摂に果たす役割をレポートしてまとめている。芸術は社会に役立つものであり、人々の生活の質

<sup>1</sup>

[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/kihon/geijutsu\\_shinko/kihonho\\_kaisei.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijutsu_shinko/kihonho_kaisei.html)

をよくする助けとなりうることを裏付けるデータにより、芸術活動の有効性を主張している。

日本国内でも数は少ないが、企業や NPO、公共施設などにより取り組みに関しては、10 年以上前から始まっていた。とはいえ、定量データによる効果測定や活動拡大の取り組みは途上であると言わなければならない。今回の文化芸術基本法への条項追加は、これからの芸術文化は社会包摂的役割など他の機能との連携も重要となり、さらにそれを社会として目指す意思の表れと読み取れるかもしれない。

これからの日本において、文化芸術活動はどのようにして社会や人々の役に立っていくことができるのか。本レポートにおいては、国内において文化が「社会包摂」に果たす役割、さらには企業との協働の可能性に焦点をあてる。先端事例の研究を通して、企業の協業に必要な要素と課題を示したい。

国内での芸術の社会包摂に関する研究については、公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」がある。これは、福祉施設や病院、学校など幅広い施設における、参加型演劇ワークショップの具体的内容と参加者への波及効果を定性・定量面から調査し、論じたものである。本レポートの対象である可児市文化創造センターala の活動も事例の一つとして含まれているので、その定量面の結果をのちほど紹介する。本レポートでは特に、社会包摂型のプログラムとそれらにかかわるステークホルダーの働きを追い、双方に共通する成功要因や課題を抽出したい。

### 3. 研究の方法

このような意識のもと、社会包摂活動の事例を検討するにあたり、10 年以上活動を継続してきた組織で、活動が顕彰など何らかの形で第三者から評価されている団体を選んだ。長期間継続してきたことで、成功要因や課題も明確になっていると考えたためである。また、ひとえに文化芸術による社会包摂活動といっても、参加者が観たり聴いたりする「鑑賞型」もあれば、実際に能動的なやり取りが求められる「参加型」もある。参加者がどこかに出かけるものもあれば、参加者の元にアーティストが来てくれる活動もある。今回は「鑑賞型」と「参加型」の双方のプログラムを扱い、共通点の有無も考察したいと考え、選んだのが下記の 2 団体である。

- ・【鑑賞型】 三菱地所の Shall We コンサート（出張コンサート）
- ・【鑑賞型+参加型】 可児市文化創造センターala における社会包摂活動

本レポートでは、鑑賞型と参加型のいずれかが有効か、というような考察ではなく、双

方の活動がうまくいった背景、活動がもたらす成果や今後の課題を見ていく。特に可児市文化創造センターでは、社会包摂活動の効果の定量評価も行っているため、数字もふまえて、市役所や教育委員会といった行政、協賛企業・団体など、関連組織にインタビューを行い、各ステークホルダーの役割や関係などを見て行こうと考えた。

### 3-1. インタビュー実施概要

#### ■三菱地所の Shall We コンサート

2018年2月6日

三菱地所株式会社 環境・CSR推進部 CSRユニット 中村可奈子氏

#### ■可児市文化創造センターalaにおける社会包摂活動

2018年2月22日

可児市文化創造センターala 館長 衛紀生氏

同 顧客コミュニケーション室係長 坂崎裕二氏

2018年2月23日

可児市福祉課 下園邦江氏

可児市教育委員会 教育長 籠橋義朗氏

ライオンズクラブ国際協会 可児ライオンズクラブ会長 高山英雄氏

ライオンズクラブ国際協会 可児ライオンズクラブ 橋本英昭氏

東濃信用金庫可児支店 支店長 土屋博義氏

有限会社亀谷電気商会 代表取締役 亀谷孝太氏

## 4. 調査結果

### 4-1. 三菱地所の Shall We コンサート（出張コンサート）

三菱地所の Shall We コンサート（以下、Shall We コンサート）は、三菱地所株式会社（以下、三菱地所）の CSR 活動の一つで、東京都内の特別支援学校にプロの演奏家を派遣して出張コンサートを行うものである。東京都特別支援学校長会了解の下、都内の特別支援学校に実施の希望を募ったうえで毎年 5 校ほどで開催し、2004 年から 14 年間で累計 1 万人以上の生徒等が参加した。2017 年にはこの活動は、「メセナアワード 2017 メセナ大賞」を受賞している。評価ポイントは、長年にわたって障がいのある子どもたちへ音楽鑑賞・体験の機会を創出し、豊かな感性を育てている点、ならびに学校に応じたプログラムの充実と発展に寄与している点である<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> <http://www.mec.co.jp/j/news/archives/mec171102mesena.pdf>

主 催：三菱地所株式会社

所在地：〒100-8133 東京都千代田区大手町 1-1-1 大手町パークビル

開始年：1996 年（現在の形態となったのは 2004 年から）

開催校数：2017 年度実績 5 校、累積 81 校、1 万人以上が参加

対 象：東京都内特別支援学校（2017 年度：59 校）

目的と概要：外出の機会が制限され生の音楽に触れる機会が限られた児童を対象に、プロの音楽家グループを派遣し、コンサートを行う

ウェブサイト：<http://www.mec.co.jp/j/csr/philanthropy/case/social/index.html>

#### 4-1-1. プロジェクトの経緯と概要

三菱地所は Shall We コンサートの前身となる取り組みとして、1996 年より地域交流や社会福祉を目的にホールでコンサートを開催していた。近隣の特別養護老人ホーム、障がい者福祉施設、児童養護施設などをコンサート会場に招待していた。しかし、ホールのような場所で行う場合、招待した施設には来場そのものが難しい方や、出かけることができても会場でのケアが難しい方がいることも多かった。そのため、2004 年から現在のように都内の特別支援学校へ出張して行うコンサートへと変更した<sup>3</sup>。

Shall We コンサートは年 1 回学校にコンサート開催希望の募集を行い、演奏家との日程調整のうえ、開催校を決定する（多数の場合は抽選なども行う）。2017 年度は 21 校の応募があったところ、5 校で開催した。実施 1 カ月前には演奏者と三菱地所側の担当者が共に学校を下見し、学校の先生と打ち合わせを行う。打ち合わせでは学校側と曲目の希望も確認し、校歌、学校で習った歌、文化祭で歌った歌、流行曲、スタジオジブリの曲、クラシック等、学校側の希望に添うように演奏家と調整のうえ決定する<sup>4</sup>。なお、コンサート開催に関して学校側の費用負担はなく、出演者への謝礼や音楽著作権使用料等は三菱地所株式会社が支払う<sup>5</sup>。

当日の演奏は体育館で 1 時間ほど実施することが多い。大きな音が苦手だったり、皆と一緒にいられなかったりする子供がいるときには、演奏後 30 分程度、演奏家が楽器を持ち教室を回る場合もある。演奏家は司会もこなし、曲の合間には楽器や曲目の説明を行うなど、生徒たちが楽しく演奏を聴けるような進行をする。演奏に加えて近年では、

<sup>3</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR 推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>4</sup> 同上

<sup>5</sup> 三菱地所の Shall We コンサート 2016 年度事業報告書

生徒の指揮者体験も実施している。学校ではこうしたコンサートを授業時間内に取り込んでいる<sup>6</sup>

演奏を担うのは活動開始以来、「こけももブラスクインテット」「MUSIC PLAYERS おかわり団」「日埴文化協会」の三団体である。「こけももブラスクインテット」は5名の金管五重奏団、「おかわり団」は弦楽器、金管楽器、パーカッションとピアノ等、7名で構成される楽団である。両団体は東京藝術大学の同期生により結成され、開始当初は若手団体であったので、Shall We コンサートは若手演奏家支援の面もあった。「日埴文化協会」はオーストリアと日本の文化交流促進を行う団体で、1985年の設立時から三菱地所が賛助法人会員であることから、演奏を担っている。弦楽器による少人数編成である<sup>7</sup>。こうした演奏家たちは、季節によっては冷暖房が効きにくく楽器への影響もあるような場所での演奏をこなしながら、子供を見て反応に合わせるなどベストを尽くしてくれるため、主催者として大変信頼しているという<sup>8</sup>。

#### 4-1-2. 成果と課題

Shall We コンサートは2004年から14年間実施したことで、都内の特別支援学校は一巡し、すでに二巡が始まっている。開始当初はなぜ一企業がこのような取り組みをしているのか理解を得られないこともあったようだが、次第に学校間での口コミでも広がるようになり、対象全校で開催されるまでに至った。生徒や学校からも良いフィードバックが寄せられている。

「心地よかったです。貴重なひと時でした。演奏がとてもきれいでした」（生徒感想）

「『手拍子も、咳も・・・いいよ。音楽を楽しみましょう』と言ってもらい、生徒たちはリラックスして聞いていました」（先生感想）<sup>9</sup>

これは、演奏者側に蓄積された知見や長年の努力により、生徒たちがリラックスして演奏を楽しめる雰囲気づくりができていていることによると思われる。他方、学校や教師にとってみても、実施費用の負担が不要で、当日運営においても場所の提供や生徒のケア以外は負担がないことも大きいだろう。

しかし、学校を一巡したことで、一巡目と二巡目で生徒たちは同じではないとはいえ、今後の内容をどのように変化させていくのかは課題であるという。またプロジェクト開

<sup>6</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>7</sup> 三菱地所の Shall We コンサート 2016年度事業報告書

<sup>8</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>9</sup> 同上

始当時は若手演奏家だったメンバーも、現在ではキャリアを積み仕事も増え、時間を確保するのが大変になってきたという。しかしながら演奏さえできれば誰にでも務まる役割ではないため、現在は継続して、同演奏家に依頼している<sup>10</sup>。

さらに三菱地所の社員参加をどのように実現するかも課題となっている。運営面では一般社員がスタッフとして参加する必要がないなか、見学のみでも価値ある経験ではあるとはいえ、ただ見学するのも避けたいという。過去には音楽が得意な社員と一緒に演奏するという案も考えた個別に声をかけたが、実際にプロの演奏家と人前で演奏するのは気が引けるとのことで実現しなかった。今後、学校とも相談し、適切なかたちでの参加の機会を見出したい<sup>11</sup>。

#### 4-2. 可児市文化創造センターala

岐阜県の可児市文化創造センターala（以下、アアラ）は、名古屋から電車で一時間ほどの場所にある市の公共施設である。人口 10 万 1500 人（2018 年 3 月現在）の可児市で<sup>12</sup>、年間施設入場者数（2016 年度）31.4 万人<sup>13</sup>を誇る。2007 年以来、館長兼劇場総監督を務める衛紀生氏が、施設運営理念に“芸術の殿堂ではなく、人間の家”を掲げ、社会包摂活動を進めてきたことが特徴である。

所在地：〒509-0203 岐阜県可児市下恵土 3433-139

施設：主劇場（1019 席）、小劇場（311 席）、映像シアター（100 席）、美術ロフト、演劇ロフト、音楽ロフト、演劇練習室、音楽練習室、映像編集室、ギャラリー、レストラン等

運営：公益財団法人可児市文化芸術振興財団（随意契約による指定管理者）

開館：2002 年

年間入場者数：2016 年度 31.4 万人

主な社会包摂活動：私のあしながおじさんプロジェクト

バリアフリーなダンス企画『みんなのディスコ』

市内小学校でのコミュニケーションワークショップ

岐阜県立東濃高校でのコミュニケーションワークショップ

施設ウェブサイト：<http://www.kpac.or.jp/>

<sup>10</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR 推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>11</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR 推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>12</sup> <http://www.city.kani.lg.jp/5828.htm>

<sup>13</sup> <http://www.kpac.or.jp/data/report/14raikan2016.pdf>

館長の衛氏は1990年代より、公立文化施設における「負担と受益の圧倒的アンバランス」に課題意識を持ってきた。文化芸術鑑賞を好むのは人口の2%にすぎず、残り98%は無関心である——にもかかわらず、公共文化施設に税金が使われるのは住民が不公平感を持っても不思議ではない、と考えていた。そこでア



ーラの館長就任以来、文化芸術鑑賞愛好家である2%だけでなく、残り98%の“劇場に縁がない人たち”へリーチを試みる「社会包摂型劇場経営」を推進してきた<sup>14</sup>。衛氏のとらえる「社会包摂」は、社会的孤立からの救済や孤立感の一時的癒しではなく、人間の可能性を引き出し自己の承認欲求を充足させる「機会」をつくることである<sup>15</sup>。

具体的には、2008年度より「ala まち元気プロジェクト」と題するイベントを年267回開催、2016年度には数を伸ばし433回実施した。「ala まち元気プロジェクト」は、「生きづらさ」や「生きにくさ」を感じている人々を文化芸術の力を活用して精神的にも社会的にも孤立させないイベントであり、29種類ある（2016年実績）<sup>16</sup>。他にも2008年度からは劇団「文学座」と「新日本フィルハーモニー交響楽団」と地域拠点契約を結び、この2団体が現在までアーラでの公演の他、学校や福祉施設に出向いたワークショップなどを行っている<sup>17</sup>。こうした社会包摂活動の功績が認められ、2017年に衛氏は第67回芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）を受賞した<sup>18</sup>。

#### 4-2-1. 私のあしながおじさんプロジェクト

「ala まち元気プロジェクト」の一つであり、アーラの社会包摂活動を代表する取組みが「私のあしながおじさんプロジェクト」（以下、あしながおじさん）である。劇場主催公演に市内の中高生を招待するという活動で2011年度に開始した。公演への参加申し込みを募るチラシを学校に設置し、希望する子供たちは自ら申し込む。すると申し込

<sup>14</sup> 衛紀生「世界劇場会議国際フォーラム 2018 基調講演」 世界劇場会議国際フォーラム 2018 p.1

<sup>15</sup> [http://www.kpac.or.jp/kantyou/essay\\_183.html](http://www.kpac.or.jp/kantyou/essay_183.html)

<sup>16</sup> ala まち元気プロジェクトレポート 2016

<sup>17</sup> 可児市文化創造センター Brochure 2017-2018, p.3

<sup>18</sup> [http://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/18/2017030801\\_besshi.pdf](http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/18/2017030801_besshi.pdf)

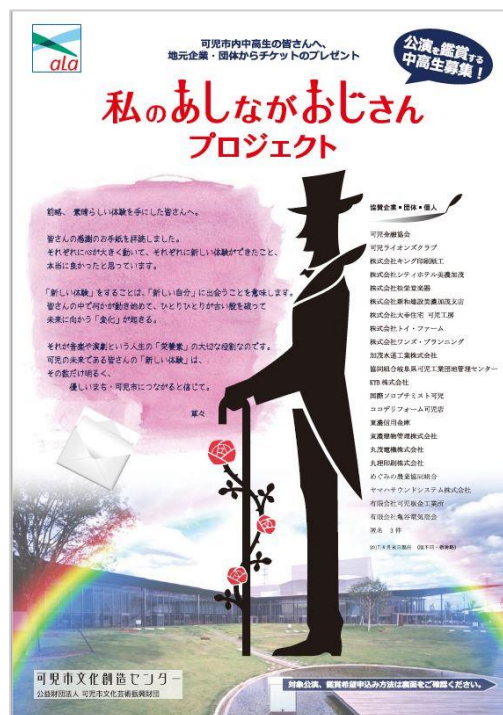


んだ子供たちは、企業協賛により無料で公演を鑑賞できる。アークによると、公演において全日程が満席ということは稀であり、どこかに空席があるものなので、その席を活用して子供たちに鑑賞の機会を提供している<sup>19</sup>という。チケット料金は一口3万円の寄付でまかなう。2016年度の実績は、寄付金は22企業・団体・個人から83万円が集まり、対象となった13公演における鑑賞者はのべ223名であった<sup>20</sup>。

2015年度からは対象を拡大した「私のあしながおじさんプロジェクト for Family」（以下、For Family）も開始した。「For Family」は一人親家庭などのために「児童扶養手当」、ならびに児童生徒就学援助制度を受けている家庭を対象として、公演に招待するプロジェクトである。

このプロジェクトの狙いは、親がダブルワークなど仕事を掛け持ちすることが多く親子が顔を合わせる機会の少ない家庭に、音楽や演劇と一緒に鑑賞するという共通体験を提供し、家族の間にコミュニケーションを取り戻してもらおうとするものである。募集は可見市の福祉課及び教育委員会の協力を得て、年に1回、対象家庭に支給決定通知などを送付するのに合わせて、「For Family」のチラシを同封してもらって告知している。プロジェクト2, 3年目に入ると、口コミで広がって参加者が増えてきているという<sup>21</sup>。

「あしながおじさん」「For Family」では、公演鑑賞の前には協賛企業・団体が応募した中高生にチケットを渡す「贈呈式」を行う。また鑑賞後には、子供たちに感想やお礼の手紙を書いてもらい、協賛企業・団体・個人に届けている。寄付を行った企業によると、贈呈式で招待する相手の顔が見えること、またお礼や感想の手書きの手紙を読み、子どもたちの喜びや心の変化を感じ、役立ったという強い実感を得られることが支援継続の理由の一つになっている<sup>22</sup>。結果としてプロジェクト開始以来、協賛企業の離脱はない<sup>23</sup>。



<sup>19</sup> 衛館長インタビューより  
<sup>20</sup> 可見市文化創造センター Brochure 2017-2018, p.32  
<sup>21</sup> 可見市文化創造センター 衛館長、坂崎係長インタビュー  
<sup>22</sup> 協賛企業インタビューより  
<sup>23</sup> 可見市文化創造センター 坂崎係長インタビュー

#### 鑑賞者の声

はじめて家族で寄席を見に行きました。久々に皆が笑っていたので、とてもいい気持ちで帰ることができました。(For Family 中学1年生「かに寄席 納涼」鑑賞) <sup>24</sup>

#### 4-2-2. ala まち元気プロジェクト

「ala まち元気プロジェクト」とは、アーラの自主事業で、「外国籍」「障がい者」「幼児」「小中高生」「大人」「高齢者」等さまざまな属性の人たちを対象に、出会いや気づきを生み、心を元気にすることを目指したイベントである。開催場所は施設内のこともあれば、外に出張して行うこともある。2016年度の参加者は7,969人、実施回数は433回にのぼる<sup>24</sup>。

#### 【主なプロジェクト】(抜粋、全29種類)

- ・児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ
- ・親子 de 仲間づくりワークショップ
- ・ココロとカラダの健康ひろば (シニア対象)
- ・スマイリングワークショップ (不登校の子どもたちが対象)
- ・多文化共生プロジェクト おはなし工作ものがたり  
(日本人+外国人と一緒に演劇をつくりあげる)
- ・新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによるオープン・シアター・コンサート (親子、障がいのある方など、誰にもオープンで騒いでもよいコンサート)
- ・文学座と作る子供向け紙芝居 (市内各施設へ巡回)
- ・アーラキネマ倶楽部・特別編 ×こども食堂
- ・私のあしながおじさんプロジェクト (前出)

広範囲にわたる企画は職員によるもので、衛館長からテーマを提示されて考えたり、自主的に企画したりしている。たとえば「おはなし工作ものがたり」は「多文化共生」がテーマである。可児市ではフィリピン人やブラジル人の住民が増えており、この人たちに、自分たちも舞台に上がっていいというメッセージを送り、日本人と外国人を結び付けたいという想いから始まった<sup>25</sup>。「親子 de 仲間づくりワークショップ」は、子育てで孤立しがちな親が仲間をつくるために企画されたもので、ワークショップ後に参加者がランチを一緒に食べる流れにしている<sup>26</sup>。このようにアーラでの企画の裏にはまず解決したい課題があり、目的設定を行ってから解決に有効な芸術の内容と方法を考え、実施

<sup>24</sup> ala まち元気プロジェクトレポート 2016

<sup>25</sup> 可児市文化創造センター 坂崎係長インタビュー

<sup>26</sup> 衛館長インタビュー

し、次はさらに内容を発展させていく。職員は企画に真剣に向き合っていると、自然に参加者のことばに耳を澄ますようになるという。本音にヒントがあり、地域の課題もそこから見えてくるというのだ<sup>27</sup>。

#### 4-2-3. 学校への出張コミュニケーションワークショップ

アールの芸術を活用したワークショップの中でも、アーティストが学校に出向いて行うワークショップはとりわけ現場での要望が高い。学校への出張ワークショップとしては、先の ala まちプロジェクトの中の一つである「児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ」、ならびに可児市に隣接する御嵩町の県立東濃高校におけるワークショップがある。

##### ■児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ

「児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ」は、可児市内の小学生を対象としたコミュニケーション能力を育むワークショップで、内容はダンスまたは演劇である。このワークショップは科目としては、体育、国語、音楽、総合的学習の時間などの中で行うが、どの科目とするのかは各校で決めてよい。2016年度は5校で40回実施した。可児市には小学校は11校あるので、全児童数のおよそ20%の子供が体験できていることになる。予算は年間200万円ほどである<sup>28</sup>。

ワークショップは一見遊びのようだが、しばらくするとクラスの雰囲気が変わり、子供は落ち着き、精神が安定する定性的な効果が見られるという<sup>29</sup>。ワークショップを通じてこどもの承認欲求を満たすことで、いじめなどを起こす互いの力関係もなくなっていく<sup>30</sup>。日頃コミュニケーションがうまくいっていない子や、クラスで話さない子などを救い上げることができ、人間関係の構築に役立つという。結果としてクラスの雰囲気が安定すると、教師は授業を行いやすくなる。このため、現在の規模の10倍で実施したいところだが、講師が足りない状態だという<sup>31</sup>。

##### ■東濃高校におけるワークショップ

岐阜県立東濃高校は伝統ある学校ではあるが、2011年には「問題校」と呼ばれ、入学

<sup>27</sup> 可児市文化創造センター 坂崎係長インタビュー

<sup>28</sup> 可児市箆橋教育長インタビュー

<sup>29</sup> 可児市箆橋教育長インタビュー

<sup>30</sup> 衛館長インタビュー

<sup>31</sup> 可児市箆橋教育長インタビュー

者の定員割れが起きていた。定員割れによる学力差に加え、地域には外国籍の子供が多く住んでいることもあって、外国籍の生徒を集めたクラスでは日本語の習熟度がバラバラで言語コミュニケーションが難しい生徒も多かった。そのため問題行動や中退者が多く、毎年 120 人程度の新入生のうち、卒業する生徒が 60%を切る状況だった。学校から相談を受けたアーラの衛館長は、「授業中は寝ている」「あいさつをしない」といった態度は、問題行動というよりもむしろ、コミュニケーションが十分でないことや、生徒たちが無気力で自己肯定感がないことに起因すると考えた。そして 2012 年から、劇団「文学座」の西川信廣氏による演劇を用いたコミュニケーションのワークショップの実施を提案したのである<sup>32</sup>。

ワークショップは新入生全員を対象に、1 回 110 分を約一カ月のあいだに 3 回行った。コミュニケーションが取れず、内向的な生徒たちに対して講師が用いた手法はシアターゲームという、俳優の訓練に用いられるものだった。このゲームでは集中、解放、想像力、リズム感、アンサンブル、反応、身体機能など様々な能力訓練を習得していく<sup>33</sup>。

#### <代表的なシアターゲーム>

##### ■ ウィンクキラ

「探偵役」と「殺し屋役」を決める。「殺し屋役」は参加者から誰かわからないようにする。参加者で円を作り「探偵役」は円の中へ「殺し屋役」は「探偵役」に気づかれないように参加者に「ウィンク」をする。された側は倒れる。「探偵役」は「殺し屋役」を探す。

##### ■ ピンポンパン

参加者で円を作り、時計まわりに 1 人目が「ピン」、2 人目が「ポン」及び 3 人目が「パン」と声を出し、「パン」をいう人は次に「ピン」をいう人を指さしながら声を出す。「ピン・ポン・パン」の順番をまちがえたり、指さしを忘れたり、指をさされたことに気付かないと負け。

##### ■ 想像大縄跳び

実際の大縄を使わず、講師がまわす縄を想像して大縄跳びをみんなで行う。

##### ■ 数字を 20 まで数える

数字を 1 から 20 まで声を出して数える。誰が声を出してもよいが、2 人以上が同時に声を出すとその人たちが負け。<sup>34</sup>

講師はどのような行動をとっても生徒たちを叱らず、学校の教師には口出しをさせなか

<sup>32</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」p.45

<sup>33</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」p.47

<sup>34</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」p.47

った。ほめることで生徒それぞれの自己肯定感を築きあげながら、一人一人と対話していった。コミュニケーションの重要性、生きていくうえで人と関わりを持たねばいけないこと、自分の考えていることを伝えるためには相手の状況も考えること、すべてを伝えることの難しさ、相手を思いやるということなどを考えさせ、伝わらないことが間違いではないことを教えた<sup>35</sup>。

すぐに見られた変化として、「他者へのイメージが払拭されコミュニケーションが取りやすくなった」「普段しゃべらない人と話してみようと思えた」「仲間意識が芽生えた」など、自己表現、他人の受容、新しい人間関係の構築、達成感の共有などがあつた。さらには、「間違ってもいいから意見を言ってみようと思えた」「生徒同士で注意ができるようになった」「クラスが落ち着いて、先生との距離も近くなった」など、自己受容と自己肯定が進み、学校を居場所として考えられるようになるという効果もあつた。効果測定をしたところ、生徒一人あたりの問題行動は直近3年の0.55回からワークショップ実施後3年の0.16回へ減少、中退率は2011年度の28.7%から実施後である2012～2013年度の20%へと減つたのである<sup>36</sup>。

この取り組みでは社会的投資収益率の測定も行った。ワークショップにかかった費用は、講師謝礼や諸経費で193万円、対して「中退者の減少」「問題行動の減少」がもたらすアウトカム、成果は高卒の生涯年収と中卒の生涯年収の比較他から算出して19,027,394円。SROI（社会的投資収益率）が9.87となつた<sup>37</sup>。

#### 4-3. アートによる社会包摂活動の課題

##### アーティストの資質、信頼関係

これまで見てきた二事例の共通事項であり活動の要となるのが、学校で授業を行うアーティストの資質、力量である。「三菱地所の Shall We コンサート」においては、事前の打ち合わせは行うにしても、演奏内容、会場での司会進行、子供たちとのやりとりも当日の流れに応じて原則演奏家に任せている。担当者は、これまで共にプロジェクトを進めてきた演奏家を大変信頼しており、他の演奏家の対応が未知数であるため依頼先を広げたりする決断はしにくいという<sup>38</sup>。

アキラが学校で行うコミュニケーション教育においても同様である。アキラは演劇ワークショップについては文学座の西川信廣氏に参加アーティスト選を一任することで、

<sup>35</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」 p.48

<sup>36</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」 p.49～51

<sup>37</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」 p.51～53

<sup>38</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR推進部 中村可奈子氏インタビュー

質を担保している。参加するアーティストは、人間として相手にどう対応できるか、相手の気持ちに寄り添えるかが重要な資質となり、それはつまり「自分に何ができるか」を問われ続けることになるため、誰でも務まるものではない<sup>39</sup>。事前に学校の先生との綿密な打ち合わせを行うが、経験豊富な優れたアーティストであれば、子どもを実際に見て問題があるかどうか分かるので適切な対応ができるという<sup>40</sup>。西川氏がこうした観点で人選している点と、文学座は他でもワークショップを年間 500～600 回行っている点で、アキラや学校側からの信頼につながっている<sup>41</sup>。

### アーティストの時間と移動の制約

このような信頼におけるアーティストの確保は活動の継続に不可欠である。「三菱地所の Shall We コンサート」は東京都内の学校での開催に限られる。それでも、プロジェクト開始当初は若手だった演奏家も、今ではプロの演奏家として多忙を極めるようになり、現在の規模でも、時間を確保してもらうのが以前と比べて難しくなったという<sup>42</sup>。

アキラにおいても、文学座に依頼しているのは、一定の規模がある劇団だからである。小劇団の場合は、限られた劇団員による公演が年に 2 回ほどある場合、公演の数カ月前から稽古を行うため、コミュニケーション授業のようなワークショップを入れてしまうと本業との両立が難しい。文学座のように劇団員が多い組織だからこそ、ワークショップへの対応も可能となる。それでも、アキラが位置する岐阜県可児市は名古屋から在来線で約 1 時間かかる。東京在住のアーティストが簡単には来にくい立地であることも人数確保の妨げになる<sup>43</sup>。可児市教育委員会としては市内の各学校に配置されているスクールカウンセラーやソーシャルワーカーのように、ワークショップ講師を各校に配置することを希望しているが、資質や人数、距離が制約となって実現していないという。また、コミュニケーションワークショップの教育効果が定量的に判明したこともあって他県・他市からの問い合わせも増えているが、物理的に対応が難しい状況だという<sup>44</sup>。

---

<sup>39</sup> 衛館長インタビュー

<sup>40</sup> 可児市笹橋教育長インタビュー

<sup>41</sup> 衛館長インタビュー

<sup>42</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR 推進部 中村可奈子氏インタビュー

<sup>43</sup> 衛館長インタビュー

<sup>44</sup> 可児市笹橋教育長インタビュー

## 5. 考察——調査結果から見える、成功要因と課題

### 5-1. 可児市文化創造センターに見る共感の連鎖と付加価値向上

アーラの社会包摂活動が機能し、地元にしっかり浸透した理由の一つは、施設体験への付加価値向上を目指した取り組みと、市民の協力・共感の連鎖と思われる。今回インタビューした可児市福祉課では、児童扶養手当支給家庭に送付する手紙にアーラの「私のあしながおじさんプロジェクト for Family」のチラシを同梱してくれている。職員はチラシの同梱に関する相談が来る前から、親子でアーラの活動に参加していたそう<sup>45</sup>。また「私のあしながおじさんプロジェクト」への協賛企業の一つは、アーラで毎晩行う「イルミネーション点灯式」イベントの協力企業だった。人口10万人強の地域だからこそなせる巡り合わせかもしれないが、過去のアーラとの接点の積み重ねが根本にあって、アーラの社会包摂活動への理解が進み、協力がスムーズにいったであろうことは想像に難くない。

そうした土壌づくりに重要な役割を果たしているのが「ala まち元気プロジェクト」である。アーラのような公共文化施設では、たいがいはホールでの芸術公演を重視し、経費節減の名目で他の活動は限られ、節約する方向にある。しかしアーラで行われていることは、経費節減志向ではなく、「付加価値の向上」である。公演を活用した「私のあしながおじさん」のような活動、公演とは直接関係しない年間を通した「ala まち元気プロジェクト」を開催する。対象は乳幼児から高齢者までと大変幅広く、誰もがどこかに自分にとって「ちょうどよい場所」を見つけられる。年間を通したこうした地道な取り組みが、施設への共感と参加者同士の仲間意識を醸成し、施設の応援者を培っている。一種のドブ板的な施設営業活動ともいえ、社会包摂活動をさらに円滑にしている。だから人口10万人の都市で年間施設入場者数31万人を達成できるのである。

ホールでの公演においても、付加価値の向上を端的に表す習わしがある。誕生日の来場者の席にバラ一輪とバースデーカードを置き、お祝いのあいさつを館長が行う。驚き喜ぶ顧客の姿に、職員も喜びややりがいを感じるという<sup>46</sup>。従業員満足と顧客満足を当たり前のようにリンクさせているアーラは、公立施設でありながら、自らを「社会包摂を担うサービス業」と位置づけ、顧客（市民）の期待を超えるための努力を惜しまない走り続ける組織のようである。全国の公共施設でも珍しいこれほどの活動を10年続けてきたことは、館長の強力なリーダーシップと「人間の家」という理念の組織浸透、この理念への職員の共感なしでは考えられない。他方、限られた職員数によって提供する

<sup>45</sup> 可児市福祉課 下園邦江氏インタビュー

<sup>46</sup> [http://www.kpac.or.jp/kantyou/essay\\_125.html](http://www.kpac.or.jp/kantyou/essay_125.html)

体験であるがゆえに、顧客の期待値を超え続けることが常態化すると、職員はいつしか疲弊してしまう可能性もあるだろう。今回の調査では、職員の満足度や要望といった側面には踏み込むことができなかったが、社会包摂活動が安定稼働してきた今後こそが、持続のためのしくみづくりと人材育成の正念場かもしれない。

## 5-2 社会包摂活動のためのアーティスト育成

アキラと Shall We コンサートの双方の課題として、学校教育における継続的な社会包摂活動において、教育を行うアーティストの育成が必要であることがあげられる。現在のワークショップを行うアーティストが未来永劫に続けることはできないし、限られた人数では場所も限られる。またいつも同じ団体が担当していれば、知見の蓄積は行われるが人数や地理の拡張は難しい。

育成の方策としては、現在担当する演奏家、文学座やアキラのような事業推進施設が主導して、育成カリキュラムや能力認定制度を設けることができるだろう。今回は調査が及ばなかったが、長野市芸術館などのように他地域でも、演劇ワークショップのファシリテーター養成講座の取り組みはある<sup>47</sup>。しかし、どんな学校のどのような問題を解決するために、どのレベルでの育成を行うのか、見えにくい。アキラの東濃高校における成果 SROI 9.87 レベルを達成するには、教育現場と密に連携しながら、解決したい課題、有効な方法を現場と共に考え、抽出していく必要がある。さらに教育現場への働きかけ、アーティスト、事業推進組織の連携により育成を行い、結果としての何らかの認定制度も必要だろう。

人数を増やす際、活動はアーティスト自身のキャリアと見合った形で進んだほうが望ましいだろう。Shall We コンサートのアーティストはキャリアの初期の頃に若手演奏家として活動を始めており、当時は現在と比べて仕事の案件が少なかったという<sup>48</sup>。キャリアの初期段階で社会包摂活動にかかわることは、時間が比較的自由となる若手にとっては対応しやすく、収入を得る機会ともなる。また自身のパフォーマンスが社会で幅広く役立つことを知る機会となる。

さらに、費用の工面もまた重要な課題である。Shall We コンサートのように費用をすべて企業が持ち、学校は内部の調整のみ、というように負担がきわめて少ない例は限られる。アキラのような文化施設による出張授業の実施には、最低限でもアーティストの謝礼や交通費、宿泊費（遠方の場合）がかかる。文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業

---

<sup>47</sup> <https://www.nagano-arts.or.jp/attend/p3863/>

<sup>48</sup> 三菱地所株式会社 環境・CSR 推進部 中村可奈子氏インタビュー



の活動別新事業」内の普及啓発事業で社会包摂活動を行う場合でも、補助金は事業費用の50%までしか供出されない規定である<sup>49</sup>。「自己負担の残り50%が大きな壁となっている」と衛氏が指摘している<sup>50</sup>ように、実現の妨げになっている。関係者がボランティアで行うのでは事業を健全に継続してことはできないだろう。

そこで資金調達については、「私のあしながおじさんプロジェクト」が一口3万円の企業協賛を22の企業・団体・個人から寄付を集めたように、数万円から参加できる仕組みを教育プログラムにも導入することが有効ではないかと考える。衛館長の印象的な言葉に、「高校が良い大学に生徒を送りこむことによって評価されるのは、いかなものか。そのような子供は、おそらく地元に戻ってこないだろう。地元に残る子供を救い、豊かな人生を送れるよう手助けすることが地域発展につながる」というものがあった。それはまさに、東濃高校のようなプロジェクトへの出資について、地元企業から理解を得る理由になりうる。さらに個人から、寄付をクラウドファンディングやふるさと納税の用途の一つに入れてもらったりするのもよいだろう。

以上のように見てきたが、今回の調査では社会包摂活動と企業の支援という視点で、出張による実施は「学校におけるもの」に焦点を当てた。しかし、社会包摂活動には、福祉施設などで引きこもりの人を対象に行うもの、病院で認知症の高齢者を対象に行うものなど有り様はさまざまである。こうした形態についても企業がどのように関わりうるのか、それは今後の研究課題として残る。また、学校でのアーティストによる授業においても、2000年からアーティストによる美術や音楽、演劇な幅広い授業を実施している「特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち」のような活動もある<sup>51</sup>。しかし今回のレポートでは、メソッドの違いや関係者との連携の仕方、効果といったことまでは調査できておらず、今度の課題であると認識している。

## 6. 結論

本レポートでは、2017年の法律改正で文化芸術基本法において芸術における「社会包摂」の役割が明記されたことを示し、今後の文化芸術活動の方向の一つとしての社会包摂をとりあげた。研究対象として、10年以上前から社会包摂活動に取り組む2つの組織の分析を行った。一つは、外出の機会が制限され生の音楽に触れる機会が限られた児童を対象に、プロの音楽家グループを派遣し、コンサートを行う三菱地所の Shall We

<sup>49</sup> [http://www.gekijo.bunka.go.jp/global/doc/h29youryo\\_03.pdf](http://www.gekijo.bunka.go.jp/global/doc/h29youryo_03.pdf)

<sup>50</sup> 公益社団法人日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」p.91

<sup>51</sup> <http://www.children-art.net/>

コンサート（出張コンサート）。二つめは公共施設である可児市文化創造センターalaの活動である。アールの活動では、子供や一人親家族に公演を無料で鑑賞できる機会を企業協賛を通して提供したり、学校におけるコミュニケーションの促進に演劇ワークショップを活用したりしている。

いずれの事例も参加者、家族、学校の先生などから大変ポジティブな感想を得ている。可児市の東濃高校の例では、問題行動の減少や退学者数の減少、社会投資収益率 9.87 という定量的な結果も得ている。

可児市のインタビューから見えてきたことの一つは、プロジェクトにかかわる行政、施設職員、参加者、参加者の家族、協賛企業といったステークホルダーが社会包摂活動を通じて徐々につながり、共感を育み、次の機会には大きな活動主体となる姿だった。共感は最初は参加者としての個人的なものであっても、その経験をもとに、次は活動の運営に協力する側に回ったり、資金提供者になったりする。可児市では「共感のマネジメント」という言葉が使われていたが、インタビューから得た共感の輪はこのようなサイクルに思われた。

さらに、学校での出張演奏やワークショップを成功させている一番の要素は、子供たちに対峙するアーティストの力量と姿勢にある。すぐれたアーティストは、現場の先生との話し合いを経て子供たちと接すると、どこに課題があるのかを察知し、的確な対応ができる。経験を積むことでさらにその対応範囲を広げていく。そのため、対応できる組織や人は限られ、一度依頼した組織から変更することは現実的に不可能である。結果として、開催頻度や場所はアーティストの本職の予定に左右されることになり、効果がはっきりしていても、規模や地理的な拡大は難しい。

今後の学校での社会包摂活動を推進するには、アーティストの育成がカギになるだろう。そのためには既存の団体の支援を受けて、早めに育成に入り、認定制度などをつくり質を担保していくべきである。学校のコミュニケーション教育を通じて地元に残るであろう子供たちの生きる力を育むことは、地域社会にとって価値がある。このような分野に企業協賛が流れる仕組みが全国で行われれば、芸術文化が社会の役に立っているということを証明することになるだろう。